

## 経済学部の中国語教育に関する一考察（二）

竹中 佐英子

### 1. テーマ選定理由

東洋大学（以下「東洋」）経済学部（以下「経済」）国際経済学科（以下「国経」）のカリキュラムポリシー（教育方針）は、経済学と共に語学教育を重視することを謳っている。その表れとして、2012年度国経入学者のカリキュラムでは、1年生春学期・秋学期、2年生春学期の3セメスターにわたり、初習外国語であるドイツ語、フランス語、中国語のうち、いずれか1カ国語が選択必修になっている。

1年生用中国語科目は、発音や会話を中心に学ぶ「中国語Ⅰ（総合）」（以下「中Ⅰ総」と、文法を中心に学ぶ「中国語Ⅰ（文法）」（以下「中Ⅰ文」）の2科目があり、国経は2科目共必修、第1部経済学科（以下「1経」）と総合政策学科（以下「総政」）は完全選択である。「中Ⅰ総」「中Ⅰ文」はそれぞれ5～6つのコース（クラス）に分かれて授業を行い、そのうち1つのコースは国経の標榜する「語学教育重視」を先導するため、「インテンシブコース」（以下「インテン」）としている（インテンの詳細については第3章第1節参照）。

本稿は東洋経済の中国語履修者に対して行った試験、およびアンケート調査の結果を分析することを通じて、現在の学習成果、教育法に対する履修者の認識などを分析した上で、クラス編成、中国語教育法、入試に対して提言を行う。

### 2. 調査方法の紹介

#### 2.1. 調査対象

本稿の調査対象は東洋経済1年生用中国語科目「中Ⅰ文」「中Ⅰ総」インテン履修者、「中Ⅰ文」4・6コース履修者である。「コース」とはクラス分けのことであり、初習外国語が選択必修である国経1年生で、そのうち中国語適性検査の高得点者はインテンで履修し、それ以外の国経1年生は教務が指定したコースで履修する。国経2年生以上で再履修（以下「国経再」）、初習外国語が完全選択である1経と総政の学生は自分でインテン以外のコースを選ぶ（インテンと4・6コースの違い

については第3章第1節で説明する)。

表1-1は調査対象を履修科目毎と所属学科毎、表1-2では入学方式毎、表1-3では入学方式がセンター試験利用入試(以下「セ利用」)である履修者の詳細な内訳を示したものである。

表1-1. 調査対象内訳(履修科目毎、所属学科毎)

履修科目	略称	合計	1経	国経	国経再	総政
中国語Ⅰ(文法)・4コース	4コース	28人	2人	16人	1人	9人
中国語Ⅰ(文法)(総合)・5コース	インテン	19人	0人	19人	0人	0人
中国語Ⅰ(文法)・6コース	6コース	30人	11人	14人	3人	2人

表1-2. 調査対象内訳(入学方式毎)

入学試験	略称	人数	4コース	インテン	6コース
3教科総合入試	3教科	37人	10人	10人	17人
ベスト2入試	ベスト2	6人	2人	2人	2人
3月入試	3月	7人	1人	2人	4人
センター利用	セ利用	17人	10人	4人	3人
帰国生入試	帰国生	1人	1人	0人	0人
留学生入試	留学生	1人	0人	0人	1人
指定校推薦入試	指定校	3人	2人	0人	1人
付属高校出身	付属校	5人	2人	1人	2人

表1-3. 調査対象内訳(センター試験利用入試で入学した履修者のみ)

	略称	4コース	インテン	6コース
センター試験利用前期4教科	セ4	1人	0人	0人
センター試験利用前期3教科	セ3	1人	2人	0人
センター試験利用前期ベスト2	セ前2	4人	1人	3人
センター試験利用中期2科目	セ中2	4人	1人	0人

## 2.2. アンケート調査実施方法

アンケート調査は2012年7月に記名式で行った。質問項目は中国語学習、大学生活、家庭に関することなど約50項目で、回答は選択肢から選択、あるいは自由に記述させ、回答は履修科目毎、所属学科毎、入学方式毎に集計した。本稿では全結果のうち、分析に必要なもののみを開示している。

### 3. 調査結果とその分析

本章では、東洋経済の中国語履修者に対して行った試験やアンケート調査の結果を分析しながら、現在の学習成果、教育法に対する履修者の認識などを分析していく。

#### 3.1. 中国語の学習成果

本節では東洋経済の1年生用中国語科目の定期試験の平均点を分析し、履修者が現行の中国語教育の下、どのくらいの学習成果を上げているかを検証する。

まず、インテン履修者と4・6コース履修者の違いについて説明しておく。4・6コースが「中I総」「中I文」2科目を異なる教員が異なる教材を用いて授業を行い、単位認定もそれぞれの教員が行うのに対し、インテンだけは2科目共に同一教員が同一教材を用いて授業を進め、単位認定は2科目一括で行う（すなわち2科目共に単位取得できるか、あるいは2科目共に単位取得できないか、のいずれかとなる）。従って、インテンは4・6コースに比べて学習進度が速く、難易度も高く、単位取得も困難であるが、単位取得できればハイレベルな中国語力が身に付くことになる。

第二言語習得研究では、同一環境の下で同一言語を学んでも学習者の成果に差が生まれる原因を解明する際、言語適性（aptitude）に着目する。Carroll 1965.は、第二言語学習の成功と相関性が高いのは▽音声識別能力▽文法的感受性▽機能的言語学習能力▽機械的に記憶する能力——の4項目である、と述べている。筆者も竹中 2012.で東洋経済の中国語履修者の言語適性を考察した際、中国語に対する興味よりも理解力、記憶力など、言語学習に必要な各種能力の方が成績を左右するとの結果を得ている。そこで2012年度、インテンが国経の標榜する「語学教育重視」を先導し、他コースより学習成果を上げるため、その履修者を中国語に対する適性の高い学生に限定する、という試みを行った。まず、4月の中国語オリエンテーションで、インテンでの履修を希望した国経新1年生約100人に対して第1回中国語適性検査を行い、上位23人を春学期に履修させる。次に、春学期成績判定の結果、インテンで単位取得できなかった成績不良学生7人を秋学期に他コースへ移動させ、それと引き換えに、他コース成績上位者のうち、インテンでの履修を希望し、かつ第2回中国語適性検査に合格した5人を秋学期からインテンに編入させる。こうしてインテンは常に、中国語適性の高い学生だけで授業を行った。

以下、インテンと4・6コースの同一試験の平均点を比較し、学習成果の違いを考察する。

表2-1は、2012年度春・秋学期に持ち込み一切不可で実施した「中I文」定期試験（各100点満点）の平均点をコース毎、所属学科毎に示したものである。なお、春学期第1・2回、秋学期第1回の問題は全コース同一であるが、秋学期第2回の問題はインテンと4・6コースで半分が同一、インテンはこの他に全く異なる範囲が倍ほど加わり、難易度も高い。春学期第3回と秋学期第3回はインテンのみ実施している。表2-1の見方であるが、4コース春学期第2回の平均点は表

表 2 - 1. 定期試験平均点 (コース毎、学科毎。どれも100点満点、カッコ内は前回試験比の得点増減)

	4 コース	インテン	6 コース	1 経	国経	国経再	総政
春学期第 1 回	56.5点	61.9点	57.3点	58.9点	58.4点	61.1点	55.5点
春学期第 2 回	58.9点 (+2.4)	68.9点 (+7.0)	69.8点 (+12.5)	66.1点 (+7.2)	68.4点 (+10.0)	73.5点 (+12.4)	49.3点 (-6.2)
春学期第 3 回		72点 (+3.1)					
秋学期第 1 回	65.9点 (+7.0)	91.3点 (+19.3)	69点 (-0.8)	68.2点 (+2.1)	76.3点 (+7.9)	61.7点 (-11.8)	83.3点 (+34.0)
秋学期第 2 回	71.8点 (+5.9)	83.5点 (-7.8)	74.7点 (+5.7)	70.5点 (+2.3)	75.8点 (-0.5)	71.6点 (+9.9)	86.2点 (+2.9)
秋学期第 3 回		80.9点 (-2.6)					

2 - 1 が示すように58.9点であり、この得点は同コース春学期第 1 回よりも2.4点上昇した、ということである。

まず、3つのコースの平均点を比較する。中国語適性の高い学生だけで構成したインテンの平均点は4・6コースに比べ、共通する計4回の試験中、春学期第2回の6コースを除いて上回っている。また、定期試験は回を追う毎に出題範囲が増え、難易度も上がっているのだが、インテンの平均点は4・6コースを春学期第1回では4.6~5.4点、春学期第2回では10点、秋学期第1回では22.3~25.4点、そして試験範囲が4・6コースの倍ほど有り、かつ難易度も高かった秋学期第2回でも8.8~11.7点上回り、4・6コースに差を付けながら上昇して行くのが見て取れる。この結果から、学習前の中国語適性検査は学習後の成果を比較的正確に予測できると言えよう。

次に、3つの学科の平均点を比較する。1経の平均点は前の回を必ず上回っており、国経は秋学期第2回が秋学期第1回よりも0.5点低下、国経再は秋学期1回が春学期第2回よりも11.8点低下(ただし国経再の履修者は春学期と秋学期で全く異なる)、総政は春学期第2回が春学期第1回よりも6.2点低下したのを除き、前の回を上回っている。この結果は、東洋経済の中国語履修者は非主専攻科目であっても、学習量が増えても、難易度が上がっても、大多数の学生が教員の指導に付いて来て、着実に成長できることを証明している。

注目したいのは総政の平均点の劇的な上昇である。秋学期第1回の平均点は春学期第2回を34点も上回っているが、この理由は履修者の質の変化にある。総政のカリキュラムでは「中I文」は完全選択であるため、総政1年生は春学期に4コースで9人、6コースで2人が履修していたが、秋学期にはこのうち4コースで5人、6コースで1人が履修を止めた。秋学期に履修を止めた総政1年生6人の春学期第1・2回の得点は8.81~41点と極めて低得点に留まり、3人は単位取得すらできなかったのに対し、秋学期も履修を継続した総政1年生4人の春学期第1・2回の得点は64.7~



92.5点と比較的高得点であった。それに伴って、4コースの秋学期第1回の平均点も春学期第2回に比べて7点も上昇している。この結果から、初習外国語が完全選択である場合、学習成果の出た学生は次の学期も継続して履修し、かつクラス全体のレベルアップに寄与してくれることがわかる。

なお、筆者は東洋経済の専任教員から「1経は国経や総政より偏差値が高く、初習外国語の成績も良い」という話を聞いたことがあり、竹中 2012, p181でも1経、国経、総政3学科の同一試験における平均点を比較したが、今回の調査結果同様、1経が国経や総政よりも平均点が高いという結果は得られなかった。しかし、1経の履修者は国経ほどおらず（表1-1参照）、判断するには早急なので、今後も観察を続けていく。

表2-2、表2-3は、2012年度春・秋学期に持ち込み一切不可で実施した「中I文」定期試験（各100点満点）の平均点をコース毎、入学方式毎に示したものである。表2-2、表2-3の見方であるが、4コースで3教科入学履修者の春学期第2回定期試験の平均点は表2-2が示すように52点であり、この得点は同入学方式履修者の春学期第1回よりも2.7点低下した、ということである。

表2-2. 春学期定期試験平均点（コース毎、入学方式毎。どれも100点満点、カッコ内は前回試験比の得点増減）

	春学期第1回			春学期第2回			第3回
	4コース	インテン	6コース	4コース	インテン	6コース	インテン
3教科	54.7点	62.5点	63.1点	52点 (-2.7)	70.5点 (+8.0)	72.9点 (+9.8)	71.1点 (+0.6)
ベスト2	55点	62.1点	85.4点	69.8点 (14.8)	63.2点 (+1.1)	78.8点 (-6.6)	72.5点 (+9.3)
3月	88.4点	50点	58.6点	78.5点 (-9.9)	51.4点 (+1.4)	68.1点 (+9.5)	68.5点 (+17.1)
セ4	52.2点			84.8点 (+32.6)			
セ3	91点	66.6点	30.6点	85.3点 (-5.7)	76.1点 (+9.5)	70.7点 (+40.1)	78.5点 (+2.4)
セ前2	60.1点	66.4点	34.3点	62.1点 (+2.0)	74.5点 (+8.1)	48.5点 (+14.2)	67.3点 (-7.2)
セ中2	65点	56点		78.6点 (+13.6)	79.9点 (+23.9)		65.8点 (-14.1)
帰国生	56点			56.5点 (+0.5)			
留学生			39.6点			78.3点 (+38.7)	
指定校	69.6点		39点	72点 (+2.4)		56.5点 (+17.5)	
付属校	26.1点	81.3点	50.4点	40.8点 (+14.7)	91.8点 (+10.5)	65.5点 (+15.1)	85.9点 (-5.9)

表 2-3. 秋学期定期試験平均点(コース毎、入学方式毎。どれも100点満点、カッコ内は前回試験比の得点増減)

	秋学期第1回			秋学期第2回			第3回
	4コース	インテン	6コース	4コース	インテン	6コース	インテン
3教科	60.3点 (+8.3)	92.9点 (+21.8)	80.7点 (+7.8)	65.5点 (+5.2)	84.6点 (-8.3)	84.7点 (+4.0)	84.7点 (+0.1)
ベスト2	69.2点 (-0.6)	92.5点 (+20.0)	54.8点 (-24)	94.8点 (+25.6)	81.5点 (-11.0)	79.7点 (+24.9)	77.7点 (-3.8)
3月		91.9点 (+23.4)	92.4点 (24.3)		89.3点 (-2.6)	70.8点 (-21.6)	79.3点 (-10.0)
セ4	94.6点 (+9.8)			91.2点 (-3.4)			
セ3	94.9点 (+9.6)	87.1点 (+8.6)	69.8点 (-0.9)	91.2点 (-3.7)	75.2点 (-11.9)	63.6点 (-6.2)	76.3点 (+6.5)
セ前2	76.4点 (+14.3)	82.2点 (+14.9)	48.6点 (+0.1)	71点 (-5.4)	69.2点 (-13.0)	69.8点 (+21.2)	76.2点 (+7.0)
セ中2	69.4点 (-9.2)	91.7点 (+25.9)		84.7点 (+15.3)	82.8点 (-8.9)		78.2点 (-4.6)
帰国生	45.2点 (+11.3)			66.4点 (+21.2)			
留学生			67.5点 (-10.8)			78.8点 (+11.3)	
指定校	96.9点 (+24.9)		58.5点 (+2.0)	76.7点 (-20.2)		69.8点 (+11.3)	
付属校	33.2点 (-7.6)	92.7点 (+6.8)	67.8点 (+2.3)	43.9点 (+10.7)	42.2点 (-50.5)	67.7点 (-0.1)	82.4点 (+14.6)

入学方式毎に最低平均点と最高平均点を見て行こう。3教科の平均点は52~92.9点、ベスト2は54.8~94.8点、3月は50~92.4点、セ4(センター試験利用前期4教科)は52.2~94.6点、セ中2(センター試験利用中期2科目)は56~91.7点であり、東洋の学力考査およびセンター試験利用の一部方式を経て入学した履修者の平均点は50点を下回ったことが一度も無い。これに対し、セ3(センター試験利用前期3教科)の平均点は30.6~94.9点、セ前2(センター試験利用前期ベスト2)は34.3~82.2点、帰国生は45.2~66.4点、留学生は39.6~78.8点、指定校は39~96.9点、付属校は26.1~92.7点と、平均点が30~40点という極めて低得点の回がある。この結果から、指定校や付属校といった学力考査を経ていない入学者よりも、学力考査を経た入学者の方が、たとえ学習歴が浅く、学習技法をあまり掴んでいない段階でも最低限の知識は身に付ける、そして学習が進み、学習技法を掴んで来るに連れて確実に学習成果を上げる、と言えるのではなかろうか。筆者は竹中 2011. p275で、他大学中国語履修者の入学方式と同一試験における成績の関係を調査したところ、今回の調査同様、一般入試などの学力考査を経た履修者の平均点の方がAO入試、推薦入試など、学力考

査を経ていない履修者よりも高い、という結果を得ている。ただし、セ利用、帰国生、留学生、指定校、付属校の入学者は3教科に比べて人数が少なく(表1-2、表1-3参照)、この結果を以って断定することはできないので、今後の更なる観察が必要である。

### 3.2. 教育法に対する認識

東洋経済の中国語教育は、国経が標榜する「語学教育重視」を先導するため、5～6つあるコース(クラス)のうち1つを「中I総」「中I文」2科目共に同一教員が同一教材を用いて授業を進め、2科目一括で単位認定を行う「インテン」としている(第3章第1節参照)。インテンは他コースに比べて学習進度が速く、難易度も高いので、履修者にとっては単位取得に大きな困難が伴う。東洋経済の中国語履修者はこういった教育法をどう考えているのだろうか?本節では教育法に対する履修者の認識を考察する。

表3. 週2こまの中国語は同一教員が担当するのが良いか(2択回答)

	4コース(28人)	インテン(19人)	6コース(30人)
全体	18人(64.3%)	16人(84.2%)	18人(60%)
成績上位	6人(66.7%)	4人(66.7%)	7人(70%)
成績中位	6人(66.7%)	5人(83.1%)	4人(44.4%)
成績下位	6人(60%)	7人(100%)	7人(63.6%)

表3は「週2こまの中国語は同一教員が担当するのが良いか」という設問に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期第1・2回定期試験の成績毎(上位、中位、下位)に示したものである。表の見方であるが、「はい」と答えたのは表3が示すように4コースでは全体28人中18人(64.3%)おり、その18人の内訳は春学期第1・2回定期試験の成績上位者に6人(上位者の66.7%)、中位者に6人(中位者の66.7%)、下位者に6人(下位者の60%)いる、ということである。

週2こまの中国語を同一教員が担当することに賛成している履修者は、実際に週2こまも筆者が担当しているインテンでは84.2%と比較的高く、実際には週2こまを異なる教員が担当している4・6コースでも60～64.3%である。成績毎に見ても、6コース成績中位者が44.4%と半数以下である以外、6割以上の支持率を上げている。東洋経済の中国語履修者はインテンの教育法を概ね支持していると言える。

筆者は竹中 2012. p188で同様の調査を行ったところ、今回の調査結果とは異なり、「週2こまが同一教員でなくても良い」と答えた履修者が7～8割にも上り、自由記述欄には「週2こまも同じ先生でウマが合わない」と、両方とも単位が取れない危険がある」「片方の先生が厳しいので、今年はやめた。来年やさしい先生にする」と書いた履修者もいた。今回の調査結果で週2こまも同

一教員での授業進行を支持する履修者の方が多かった理由は、「達成感」の実感にあると考えられる。表2-1でコース毎の定期試験平均点の推移を見るに、筆者が週2こまとも担当するインテンは学習量が他コースの倍以上有り、難易度も他コースに比べて格段に高いにもかかわらず、回を追う毎に平均点が上昇し、着実な成長が見られる（第3章第1節参照）。筆者は毎回、授業開始時5分間と授業終了直前10分間に、その回の授業の重要点から出題する小テストを行い、1人ずつ細部迄添削して返却する。定期試験は小テストを中心に出题するので、間違えた個所を勉強し直しておけば確実に得点が取れる。履修者は「インテンは授業進度が速いが、筆者の指導に付いて行けば学習成果が出る」と実感し、他コース履修者もインテン履修者から学習成果を又聞きし、週2こま同一教員による授業進行を評価したのではなかろうか。

今回の調査結果には、定期試験後の指導も功を奏しているかもしれない。筆者は各試験実施後必ず、各履修者に答案と共に個人成績表（得点、平均点、全受験者中順位）も返却し、現在の中国語力を客観的に把握させる。秋学期になると、インテンの履修者はたとえ8割得点できても「平均点より低いから、もっと頑張ろう」と言うようになり、向上心が上がっている。また、高得点者数名の名前は公表すると共に、努力賞（北京大学ネーム入りTシャツ、中国語に訳された日本の漫画本『ワンピース』など）を授与し、1点でも多く獲得した履修者を高く評価する。中には、高得点者名簿に目もくれず、努力賞を見て「そんなもん、要らない」と言う履修者もいるが、表彰された履修者は概ね素直に喜び、試験勉強に勤しむようになる。

教育法に対する評価の調査はまだ初歩的なものであるので、今後も更なる調査、考察を続けていく。

### 3.3. クラスメートに対する認識

本節ではクラスメートに対する履修者の認識を考察し、東洋経済の中国語履修者が同じコースで学ぶクラスメートをどのように見ているかを探る。

表4は「中国語のクラスを能力別に編成することに賛成か」、表5は「自分の中国語の成績は他の学生の影響を受けているか」、表6は「他の学生がもっと優秀なら自分の成績ももっと伸びてい

表4. 中国語のクラスを能力別に編成することに賛成か（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	23人 (82.1%)	15人 (78.9%)	21人 (70%)
成績上位	8人 (88.9%)	5人 (83.3%)	7人 (70%)
成績中位	8人 (88.9%)	5人 (83.3%)	7人 (77.8%)
成績下位	7人 (70%)	5人 (71.4%)	7人 (63.6%)

表5. 自分の中国語の成績は他の学生の影響を受けているか（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	8人 (28.6%)	10人 (52.6%)	8人 (26.7%)
成績上位	2人 (22.2%)	1人 (16.7%)	4人 (40%)
成績中位	2人 (22.2%)	4人 (66.7%)	3人 (33.3%)
成績下位	4人 (40%)	5人 (71.4%)	1人 (9.09%)

表6. 他の学生がもっと優秀なら自分の成績ももっと伸びていたか（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	3人 (10.7%)	8人 (42.1%)	6人 (20%)
成績上位	1人 (11.1%)	3人 (50%)	1人 (10%)
成績中位	1人 (11.1%)	4人 (66.7%)	4人 (44.4%)
成績下位	1人 (10%)	1人 (14.3%)	1人 (9.09%)

たか」という設問に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期第1・2回定期試験の成績毎（上位、中位、下位）に示したものである。表4～6の見方は表3の見方と同じである。

まず表4を見るに、「能力別クラスに賛成」と答えた履修者は、コース毎に見ても成績毎に見ても6～8割と、比較的高い支持を得ている。この理由は、経済1、2年生用必修英語がすでにTOEICの得点に基づいた能力別クラスでの授業を実施しており、語学の授業を能力別に行うことに履修者が慣れているためだと考えられる。第二言語習得の成否は言語適性（aptitude）と相関関係があるため（第3章第1節参照）、努力に見合った成果が出づら履修者がいる一方、一部の履修者は中国語主専攻以上の成果を出し、不得意な履修者に合わせた低レベルの授業に憤慨する。言語適性の高い者とそうでない者が同一クラスにいるとお互いが不幸になるが、能力別クラスなら到達目標もクラス毎に異なり、どのクラスにいても単位取得、卒業要件クリアに近づくので、主専攻科目（経済学）の授業が増える3、4年生の学習を妨害することも無くなるだろう。

次に表5、6を見るに、「自分の中国語の成績は他の学生の影響を受けている」と答えた履修者は、インテン成績中・下位者で6～7割である以外は2～4割台、「他の学生がもっと優秀なら自分ももっと伸びていた」という履修者も、インテン成績上・中位者で5～6割である以外は1～4割台、と比較的低い割合に留まっている。筆者は竹中 2008. p239、竹中 2009. p214、竹中 2011. p276で他大学中国語履修者に対して同様の調査をしたところ、自分の学習成果が伸びない原因を「自分が勉強不足」「自分が勉強が不得意」などの内的なものではなく、「教員側の説明が悪い」「クラスメートが成績不良」などの外的なものにあると考えている履修者の多いクラスの方が同一試験の平均点が低い、という調査結果を得ている。Lefcourtは問題の原因について、外的帰属傾向の人は内的帰属傾向の人よりも成功、失敗両方の責任を受け入れない傾向にあるとしているが、この調査結果は、

東洋経済の中国語履修者があまり外的帰属傾向ではないこと、すなわち、自分の成績が良くない原因を責任転嫁しないことを示している。このような気質が、教員の指導に忠実に付いて来て、定期試験の平均点向上となって表れていると言えよう（第3章第1節表2-1参照）。

### 3.4. ピンインに対する認識

本節では東洋経済の中国語履修者の「ピンイン」に対する認識を考察し、中国語教育法を再考する手立てとしたい。

中国語を記録する記号は漢字（中国大陸ならその画数を減らした簡体字）である。漢字のほとんどは意味を表す「偏」と読み方を表す「旁」から構成される「形声文字」であるが、旁はローマ字ほど見てすぐに読み方がわかるものではない。周有光 1995. p1によれば、現代中国語で常用されている漢字約7,000個のうち、旁が忠実に読み方を表す漢字は39%に留まるといふ。そこで中国政府は1958年、中国語の漢字音を表すローマ字表記法を制定した、これが「ピンイン」である。例えば中国語で「私」を意味する語は“我”であり、ピンインでは“wǒ”と表記、「ウォー」のように読む。ピンインはその表記から連想される読み方が実際の発音とはかけ離れているものも多く、例えば“ian”は「イアン」ではなく「イエン」、「zi」は「ジー」ではなく「ツー」のように読む。ピンインは書く際にも規則がある。例えば三重母音“uei”は単独で音節を構成する時は“wei”、前に子音が付く時には間にある“e”を省いて子音+“ui”と書く。だから子音“k”の後ろに三重母音“uei”が続く時は“kui”と書くので、「クイ」と読んでしまいそうだが、正しくは「クエイ」のように読む。このようにピンインはその読み書きに様々な規則があるのだが、それは体系的で例外が無く、1度覚えてしまえば未知の中国語漢字音が一目でわかるようになる、非常に便利な学習ツールである。

筆者は中国語教育においてピンインの読み書き規則の習得を重視しているが、その理由は2つある。1つは、現在出版されている中国語の教材や辞書が全て、中国語の漢字音をピンインで表記しており、これを習得しておかないと、教材を音読することも、辞書を引くこともできず、中国語学習に大きな支障をきたすからである。1年生用中国語科目担当教員は皆、ピンイン教育に非常に力を入れているが、東洋経済では2年生用中国語科目の履修者でも“ian”を「イアン」、「zi」を「ジー」と読む学生が後を絶たず、ピンイン学習に躓いている学生が多く見受けられる。もう1つの理由は、筆者が1人でも多くの履修者に中国語検定試験（以下「中検」）に合格して欲しいと考えているのだが、この試験には必ず一定量のピンインが出題されるからである。「中検」とは1980年代～日本中国語検定協会が主催している中国語の能力を測る試験であり、中国語版英検とも言われている。最低レベルの準4級は大学の初習外国語第一年度半期終了、その1つ上のレベルの4級は第一年度全部終了、さらにその1つ上のレベルの3級は第二年度全部終了で学んだ語彙や文法項目を習得していれば対応できる。幅広い教養を身に付けるべき大学教育の中で、特定の試験合格を目標とする

ことには批判的な意見もあるが、日本の大学で中国語を学んでいる履修者には、せっかく学んだ中国語を使う場や学習成果を実感する場が少なく、学習意欲を維持することが難しい。このような状況の下、「中検」に合格すれば、現在の自身の中国語力が客観的にわかり、学習成果を体感することができるし、更なる上のグレードを目指す学習意欲にもつながるだろう。また、中国へ進出している日本企業の中には「中検」合格者を積極的に採用するところも少なくない。筆者は授業中、意識的に「この単語、語順は良く出る」「中国語非主専攻の学生が3級に合格していれば、就活に有利になる」と言い、履修者の学習意欲を高めるようにしている。さて、東洋経済で中国語を履修した学生が合格を目指せるレベルの「中検」準4級、4級、3級には必ず毎回、ピンインに関する問題が出題され、配点の2割程度を占める。資料1は「中検」準4級リスニング問題の一例で、読み上げられた中国語の音声と一致するピンイン表記を4つの選択肢の中から選ぶという問題である。

【資料1】これから読む(1)~(5)の中国語と一致するものを、それぞれ①~④の中から1つ選び、その番号に○を付けなさい。(第76回準4級リスニング、10点)

- |           |       |       |       |
|-----------|-------|-------|-------|
| (1) ①jīn  | ②jìn  | ③jīng | ④jìng |
| (2) ①xiào | ②jiào | ③shǎo | ④xiǎo |
| (3) ①sù   | ②shǔ  | ③shū  | ④sú   |
| (4) ①cí   | ②cǐ   | ③zǐ   | ④jì   |
| (5) ①hāi  | ②huài | ③hēi  | ④hái  |

読解や日文中訳といった問題で満点を取るのは非常に困難であるが、ピンインの読み方や単語のピンイン表記は覚えておきさえすれば誰でも満点が取れる。準4級、4級、3級の合格最低点は満点の6割強だから、資料1のようなピンインの読み方を問う問題で満点を確保しておけば、合格可能性は格段に高まる。

表7は「ピンインの読み書き規則が身に付いたか」、表8は「ピンインの読み書き規則を身に付けるのは難しいか」という設問に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期第1・2回定期試験の成績毎（上位、中位、下位）に示したものである。表7、8の見方は表3~6の見方と同じである。

まず表7を見るに、「ピンインの読み書き規則が身に付いた」と感じている履修者は、コース毎に見ると5~6割台と半数強で一致している。一方、成績毎に見ると、上位者では80~100%の高きに達しているのに対し、中位者は4~5割台、4コースとインテンの下位者では2割台に留まり、成績下位者の方が「ピンインが身に付いていない」と感じている。次に表8を見るに、「ピンイン



表7. ピンインの読み書き規則が身に付いたか（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	15人 (53.6%)	11人 (57.9%)	19人 (63.6%)
成績上位	8人 (88.9%)	6人 (100%)	8人 (80%)
成績中位	5人 (55.6%)	3人 (50%)	4人 (44.4%)
成績下位	2人 (20%)	2人 (28.6%)	7人 (63.6%)

表8. ピンインの読み書き規則を身に付けるのは難しいか（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	20人 (71.4%)	7人 (36.8%)	15人 (50%)
成績上位	5人 (55.6%)	1人 (16.7%)	4人 (40%)
成績中位	7人 (77.8%)	3人 (50%)	4人 (44.4%)
成績下位	8人 (80%)	3人 (42.9%)	7人 (63.6%)

の読み書き規則を身に付けるのは難しい」と感じている履修者は、インテン成績上位者では16.7%の低きに留まっているのに対し、インテン成績下位者と6コース成績上・中位者では4割、4コース成績上位者とインテン成績中位者と6コース成績下位者では5～6割に割合が高まり、4コースの成績中・下位者に至っては8割前後にも上り、成績下位者ほど「ピンインが難しい」と感じている。この調査結果から、ピンインの読み書き規則が身に付いたと実感できた履修者、ピンインの読み書き規則を身に付けることに困難を感じない履修者ほど、学習成果を上げていることがわかる。筆者は竹中 2012. p184～186で、「成績中・下位者ほどピンインの読み書き規則の把握を困難に感じ、再履修にもなりやすい」との調査結果を得ているが、今回の調査結果はそれを更に補強するものである。

表9は「ピンインの読み方を仮名で書き取るか」という設問に対して「はい」と回答した学生数をコース毎、春学期第1・2回定期試験の成績毎（上位、中位、下位）に示したものである。表9の見方は表3～8の見方と同じである。

筆者は毎回の授業でその回の授業に登場する単語一覧表を配布、まず教員の後について1単語数

表9. ピンインの読み方を仮名で書き取るか（2択回答）

	4コース (28人)	インテン (19人)	6コース (30人)
全体	22人 (78.6%)	14人 (73.7%)	25人 (83.3%)
成績上位	4人 (44.4%)	2人 (33.3%)	10人 (100%)
成績中位	8人 (88.9%)	6人 (100%)	6人 (66.7%)
成績下位	10人 (100%)	6人 (85.7%)	9人 (81.8%)



回ずつ全員で音読した後、履修者を1人ずつ指名して1～3単語ずつ音読させるのだが、ピンインはその表記から連想される読み方と実際の発音が大きくかけ離れているものも多いため、音読練習の際、ピンイン“ian”“zi”“kui”の横に「イエン」「ツー」「クエイ」と書き取っている履修者が一定数見受けられたので、この調査を行ってみた。表9を見るに、ピンインの読み方を仮名で書き取っている履修者は、コース毎に見ると7～8割と比較的多いが、成績毎に見ると、100%に達しているのは4コース成績上位者、インテン成績中位者、6コース成績上位者であり、成績との関連性が見出せそうに無い。この調査結果を以って、ピンインの読み書き規則を把握するためにその読み方を仮名で書き取ることは、功を奏するともそうでないとも言えないようである。どのような学習技法を持った履修者がピンインの読み書き規則の把握に成功しているかの解明は、今後の研究課題としたい。

#### 4. 分析結果の総括

以上、東洋経済の中国語履修者の学習成果、教育法に対する認識などを分析した結果、以下の4項目が明らかになった。

- (1) 学習前の中国語適性検査は、学習後の中国語の成績をある程度正確に予測できる。
- (2) 外国語教育における能力別クラス編成は支持を受けている。
- (3) 単位取得が困難な教育法でも、履修者が学習成果が上がったと実感すれば支持される。
- (4) ピンインの読み書き規則の把握に成功すると、中国語学習に困難を感じず、学習成果も上がる。

また、東洋経済の中国語履修者には以下のような特徴が見られる。

- (1) 中国語は非主専攻科目だが、一定の成果を上げることができる。
- (2) 学力考査を経て入学した履修者の方が、学力考査を経ないで入学した履修者より、中国語学習において学習成果を上げることができる。
- (3) 学科による中国語の成績の差はあまり無い。
- (4) 中国語が完全選択である履修者は、学習成果が上がれば履修を継続する。
- (5) あまり責任転嫁しない、教員の指導や励ましを比較的素直に受け入れる気質である。

#### 5. 提言

以上の分析結果に基づき、クラス編成、中国語教育法、入試に対し、以下の3項目を提案する。

- (1) 中国語のクラス編成は言語適性検査を活用し、能力別にする。
- (2) ピンインの読み書き規則を完全にマスターできる中国語教育法を開発する。学習成果を実感できる教育法なら、選択必修でも完全選択でも、継続して履修する学生が増え、国経のカリキュラム

ポリシーである「語学教育重視」を実現することができる。

(3) 入試を再考する。指定校、付属校といった入学方式についても、何らかの形で学力考査を課せば、確かな基礎学力を備えた学生の獲得につながる。

#### 【参考文献】

Carrol, J. 1965. The prediction of success in intensive foreign language training. In Glaser, R. (ed), Training, research, and Education. Univ. of Pittsburgh Press

周有光 1995. 《汉语拼音方案基本知识》、语文出版社

竹中佐英子 2008. 「中国語の学習成果を左右する要素の分析」、『目白大学人文学研究』第4号、pp.229～241

竹中佐英子 2009. 「中国語学習者に関する一考察—明治学院大学と目白大学の比較—」、『カルチュラル』第3巻第1号、pp.211～221

竹中佐英子 2011. 「中国語学習者に関する一考察（二）」、『カルチュラル』第5巻第1号、pp.271～282

竹中佐英子 2012. 「経済学部中国語教育に関する一考察」、『経済論集』第37巻第2号、pp.177～191